

日韓の述語と省略

——構成素の結合様式の違いに関する試論——

尹 盛熙*

Predicates and Ellipsis in Japanese and Korean :
Toward an Explanation for the Differences in Constructing Patterns

Sunghee YOUN

要旨：本論文の目的は、日本語と韓国語の様々なテキストに見られる省略の例から、省略形式における両言語の特徴とそれを支える構造的な違いについて考察することである。日本語では特に述語において全体または一部が欠ける例があり、その結果、文レベルで形態・統語的に不完全な述語が用いられる傾向がある。そのような日本語の省略形式は、韓国語において同一の構造が再現しにくいことが多い。このような省略パターンの違いは、名詞句の連結構造など他の例にも見られる。このことから、語・句・文といった言語単位における構成素の結合のあり方において、日本語は、結合する要素同士が磁力のみでつながり、結合部で比較的簡単に離したりくっつけたりできる「磁石」、韓国語は結合する要素同士で決められた型があり、それが合えばしっかりかみ合って切り離しにくい「チェーン」のような様相を呈すると言える。

Abstract :

This paper describes different structural features in ellipsis and related grammatical devices in Japanese and Korean, from observation of various elliptical phenomena in the two languages. Japanese examples show a specific tendency toward the partial or complete truncation of predicates, which consequently leads to the morphosyntactic incompleteness of sentences. In most cases, however, the Korean counterparts cannot be considered natural. Given that this discrepancy has also been commonly observed to be shared in some other Japanese phrasal structures, this might be seen as a supportive piece of evidence illustrating structural differences between the two languages in the construction of linguistic units from their component elements. This difference can be interpreted as being in some way analogous to the difference between a string of magnets and a chain. In the magnet-like system of Japanese, it is relatively easy for elements to be removed from or attached to each other in phrases or sentences. In the Korean chain-like system, in contrast, a component can only be connected in a methodical, predetermined way and is not easily separated from its adjacent parts.

キーワード：省略、形態・統語的不完全さ、名詞句

*関西学院大学国際学部教授

1. はじめに

本論文の目的は、日本語と韓国語の様々なテキストに見られる省略の例から、省略形式における両言語の特徴とそれを支える構造的な違いについて考察することである。

日本語では、名詞述語文におけるコピーラ（「～だ」）やサ変名詞を用いた文における形式動詞（「～する」）などの機能語が韓国語の場合に比べて省かれやすく、その結果、形態・統語的に不完全な述語が用いられる傾向がある。また動詞述語文における省略現象でも、実質語の述語の一部または全部が省かれるなど、同じく不完全性が見られることが確認できる。省略形式におけるこのような違いは両言語の他の構造でも見られることがあるが、例えば日韓の一部の名詞句構造で容認度の違いがあることも関連すると考えられる。本稿ではこれらの事実の観察に基づき、語・句・文といった言語単位における構成素の結合のあり方が日本語は「磁石」のような様相を、韓国語は「チェーン」のような様相を呈することを述べる。

2. 様々なテキストにおける日韓の省略傾向の違い

言語コミュニケーションでは、人間が行う行動一般同様、限られた時間と労力をできるだけ節約しようとする意図が働くことになる。そのため文及び発話では、短い形式で多くの情報を効率よく伝えられる戦略の一つとして省略が用いられる。ただ、むやみに省いて短くするのはメッセージの伝達性が保たれず、ミス・コミュニケーションのリスクを負うことになる。そのため、すでに言及された情報や、文脈から復元しやすい情報が優先的に省かれるなど、情報の損失が少ない方向で省略が行われることになる。そのことから、具体的な指示対象を持たない「機能語」の方が「実質語」に比べて省略されやすいのは普遍的な傾向であると予測できる。構造的に類似点が多いとされる日本語と韓国語の場合でも、格助詞や形式動詞「する」「hata」、コピーラ「だ」「ta/ita」などの機能語は、具体的な意味内容をもつ実質語に比べて省略されやすい¹⁾。その一方で、両言語の間には異なる傾向も見られ、例えば新聞見出しや翻訳字幕など、時間的・空間的制約が強いテキストで日本語の方が省略の度合いが強いことが報告されている²⁾。

実際に両言語の様々なテキストを観察すると、特に日本語に特徴的な省略の傾向が見られる。例えば以下はそのような省略傾向を端的に示す例である。

表1 TV 広告「まっすぐおいしいどん兵衛」より

話者	30秒バージョン	15秒バージョン
A (1)	どうしてさっきからずっと <u>麵ばかり食べるんですか</u>	どうして麵ばかり
A (2)	お揚げ食べないんですか	
A (3)	キツネが嫌いに？	キツネが嫌いに？
A (4)	やっぱりそうだ、嫌いなんだ	
B (1)	ほら見てください	
B (2)	一番好きなものは最後に <u>食べるんです</u>	一番好きなものは最後に
A (心)	一番好き	一番好き

1) 尹盛熙 (2015). 「新聞見出しにおける日韓の省略と縮約－形式的違いを中心に－」『日本學報』104, 33-50. 尹盛熙 (2016). 「日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現－韓国語との対照分析」『社会言語科学』18(2), 19-36.

2) 同上

表1はカップ麺のTV広告の台詞を記したもので、女性話者Aと男性話者B、2人の会話形式で構成されている。時間制限が明確である広告は、商品に関する何らかの情報提供を決められた時間内に行う必要があるという点で、情報内容の取捨選択や省略が頻繁に行われることになる。例えば「(お揚げは)」「(一番好き)だ」が用いられないなど、全体として形式的な簡潔性が目立つ。

さらに「30秒バージョン」と「15秒バージョン」を比べると、15秒バージョンではその傾向がより顕著になる。後者ではいくつかの台詞がカットされている上に、省略されない文でも、述語が省かれている例がある。例えばA(1)の「どうして麺ばかり」は、30秒バージョンの該当台詞から下線部の「食べるんですか」が、そしてB(2)の「一番好きなものは最後に」は、下線部の「食べるんです」が省略されたものである。また興味深い点は、A(3)の場合、30秒バージョンでもすでに「キツネが嫌いに？」という、述語のない形式を用いているところである。視聴者はおそらく「なったんですか」などが省かれたものと容易に推測できるだろうが、どのバージョンにおいても省略とそれによる文としての「不完全さ」が戦略的に活用されていることが分かる。

述語における省略は、日本語の他のテキストでも現れており、新聞記事やTVニュース、討論番組などの情報提供コンテンツ、そして漫画やアニメーション、ドラマなどのサブカルチャーコンテンツと幅広いテキストで例が観察される。

- (1) a. 一郎、これは八軒君の仕事。(漫画/アニメ)
b. 護身に銃所持が必要だと主張。(新聞記事)
- (2) a. 米空母、しばらく日本海に(新聞見出し)
b. 話があるんだ。ドーンソン教授を?(翻訳字幕)
c. 外に行ってくれてありがたいという言葉はひとつあった。(討論番組)
d. 我慢したからこそ最後にチャンスがきたと錦織。(ニュース)
- (3) kwukmin-tul-i ihayha-ki himtu-n t hayto-ka ani-nka sayngkak-ul ha-pnita.
国民が 理解しがたい 態度ではないか 思います(討論番組)

上記(1)の各例は、下線部の後ろで何らかの形式が現れていないという点で共通している。まず(1a)では名詞述語文「～八軒君の仕事だ」よりコピュラ「～だ」が、(1b)では「～主張した」というサ変名詞文から形式動詞「する」が省かれており、それぞれ名詞が文を締めくくる「名詞止め文」になっている。

(2)は実質語の動詞が省かれた例であり、それぞれ「留まる」「知っているか」「いう」「語る」などが省かれたものと推測される。述語の省略により、(2d)以外の各例は助詞で文が終わる「助詞止め文」になっている。このように述語の一部または全部を省くと、それに付帯するはずのテンス・アスペクト・モダリティなどの文法形式も使用が制限されることから字数を制限しやすくなるため、省略戦略としては効果的であると言える³⁾。

一方で韓国語の場合、(1)(2)のような述語における省略は新聞見出しなど一部のテキストでは見られるものの、日本語ほど頻繁に用いられず、(1)(2)の各例の構造を韓国語で再現するとほとんどが不自然なものとなる⁴⁾。例えば(2c)の日本語のように、引用動詞を省いて引用マーカの助詞「と」に相当する「ko/lako」で文や発話を止めるのはかなりぎこちない。実際、自然発話に近い生放送の討論番

3) 同上

4) (2a)の場合、韓国語の見出しでも助詞止めの例が見られる(「haykcamswuham misikan hankwuk-ey (核潜水艦 ミシガン韓国へ)」が、一般的に韓国語の新聞見出しでは述語より助詞の省略が起きやすい傾向があることが指摘されている。詳細は尹(2015)を参照。

組で観察されるのは、引用助詞と動詞の両方を省いて補文の中身だけを発話するか、または (3) のように動詞は残して引用助詞だけを省く、どちらかのパターンがほとんどである。

述語における日韓の省略傾向の違いは、同一の事柄を報道した日韓の見出しを比較するとより明確になる (尹 2017b)。

- (4) a. 対北朝鮮で新組織 米 CIA (朝日新聞 20170512)
 b. CIA に対北専門組織 核・ミサイルの脅威分析 (読売新聞 20170512)
- (5) a. mi CIA, pwukhaykcentam ‘kholia immwuseynthe’ sinsel
 米 CIA 北核全担 コリアミッションセンター 新設 (東亜日報 20170512)
 b. CIA, pwukhayk-man kwanli-hal thukpyelcocik mantul-ess-ta
 CIA 北核のみ 管理する 特別組織 作った (朝鮮日報 20170512)
- (6) a. 非婚ですが、それが何か ϕ !?
 b. pihon-ipnitaman kukey eccaysstakwuyo?!
 非婚ですが それが どうかしたというの

(4) と (5) は同一の事柄を報道した記事の見出しである。日本語例 (4) では、下線部の名詞句と関わる内容上の述語が明示されていない。例えば (4b) の場合、記事本文には「[朝鮮ミッションセンター] を新設したと発表した」と述語が用いられているが、見出しだけでは「対北専門組織」が他の成分とどのように関連付けられるかは明確ではなく、読み手の推測に委ねられることになる。一方で韓国語例 (5) では、(4) の「新組織」、「対北専門組織」に相当する「kholia immwuseynthe (コリアミッションセンター)」「thukpyelcocik (特別組織)」などに対して、「sinsel (新設)」「mantul-ess-ta (作った)」という意味上の述語がそれぞれ明示されている。また (6) では、(6a) が日本で出版された本のタイトル⁵⁾で、(6b) が韓国語翻訳書のタイトルであるが、(6a) では「何か?」の後に述語がない反面、(6b) の韓国語タイトルでは「eccay-ss-takwu-yo (どうかしたというの)」といったふうに述語が足されていることが分かる。このような事実から、情報内容、目的や機能が同じ場合でも、日本語と韓国語の間では異なる省略形式をとる傾向があると言える。

以上で例を紹介したテキストは、不特定多数への情報発信を目的とする放送や新聞、書籍などのマスメディアのものである。これらは時間的、空間的制約が比較的強く、効率的な情報伝達が求められるテキストである。マスメディアの言語は無論、自然談話とは異なるものだが、多数への影響力の強さを考慮すれば、自然談話のあり方とも関連すると考えるのが妥当であろう。以下ではマスメディアの言語のみならず、自然談話などでも見られるいくつかの現象について観察する。

3. 述語省略と名詞句－結合様式の違い

この節では、前節で紹介した省略傾向が日韓の言語的特性の違いとはどのように関わるのかについて、いくつかの関連現象にふれた上で、現時点での方向性を述べておく。

3.1. 日本語の述語に見られる「不完全さ」

様々なテキストの例より、日本語では、述語における機能語及び実質語の省略が韓国語に比べて頻繁に表れ、形態・統語的に不完全な形の述語の発話が比較的容認されやすいことを見た。それに比べて韓国語では、日本語のような名詞止め・助詞止めの形式は制限されることから、述語を含む言語単位に形

5) 上野千鶴子・水無田気流 (2015). 『非婚ですが、それが何か!? 結婚リスク時代を生きる』ビジネス社。

態・統語的完全性が要求される傾向が強いとと言える。

このような傾向は、日本語において他のレベルでも観察される。例えば話しことばでは (7) のようにイ形容詞の語幹のみが独立した発話として用いられることがある。

(7) あつ (い)！うま (い)！

(8) As, ttuke (-we)!
あつ 熱い

韓国語の場合も (8) のように用言の一部の音節が脱落することはあるが、単純に語根の最後の母音 (-e) に続く音節の母音 (-e) が類似しているために落ちやすいという、音声的な条件による現象と考えられ、日本語のイ形容詞のように、形容詞全般に対して適用しやすいものではない⁶⁾。(7) のような現象も述語の完全性にこだわらない日本語の特徴的な部分と言えるだろう。

また、日本語において構成成分を助詞「の」でつなげる名詞句では、意味上の述語が省略されていると見られる例がある。

- (9) a. 40℃ もの高熱
b. 母へのプレゼント (日本語記述文法研究会 2009)
c. 東京までの列車 (日本語記述文法研究会 2009)
d. 具体的な言及はなかったとの非難が強い。
- (10) a. [?? 40-to-ssic-uy / 40-to-na toy-nun] koyel
40℃ も の 40℃ も なる 高熱
b. [?? emma-eykey-uy / Emma-eykey tuli-nun] senmwul
母 へ の 母 へ 贈る プレゼント
c. [?? Tokyo-kkaci-uy / Tokyo-kkaci ka-nun] yelcha
東京 までの 東京 まで 行く 列車
d. kwucheycekin enkup-un [* epsessta -ko-uy / epsessta-nun] pinan-i keseyta.
具体的な 言及 は なかったとの なかったという非難が強い

例えば (9 a) の場合、連体修飾句と被修飾名詞という構成の「40℃ もある高熱」に意味的に対応するものと考えられるが、連体修飾句「40℃ もある」における述語の「ある」は、(9 a) の名詞句では構成成分になっていない。即ち、(9 a) の成分である「40℃ (も)」「高熱」が、意味的にどのような関わりを結んでいるかを示す手がかりである述語がないわけである。(9 b) でも同じく、「母(へ)」と「プレゼント」を意味的に結び付ける「贈る」などの述語が現れていない。(9 d) のように「の」に先行するものが単体の名詞(句)ではなく節である場合も同様で、「～と」という助詞止め⁷⁾の形から、続くはずの引用動詞「いう」が省略されたと推測できる例である。(9) のようなタイプの名詞句は、前後の成分から意味関係を想定しやすい述語を省略し、残りの成分を助詞でつなげているものとして理解できる。一方で韓国語の場合、このような構造は (10) で見られる通り、たいてい容認度が落ちる傾向があり⁷⁾、

6) ただし日本語の場合でも、何らかの制約はあるように考えられる。例えば「まずい」の場合、「おいしくない」という意味では「まずっ」と言うのは自然だが、「望ましくない」という意味で「まずっ」はややごちないことから、意味的または文脈的な使用条件はあるものと思われる。

7) 韓国語でも「milay-lo-uy chotay (未来への招待)」などの例が見られないわけではないが、やはり日本語の場合に比べて容認度が下がる傾向があり、この用法自体、日本語の影響による誤用と見る立場もある。

構成成分である名詞（句）同士の意味関係を述語（連体修飾形）を用いて明示するのがより自然とされる。

もう一つ、同様の傾向を示す名詞句の例を以下に紹介する。

- (11) a. 階段に座っての食事（茂木・森 2006）
- b. 相手の指摘を受けての反論
- c. 政権交代を狙っての事件（茂木・森 2006）
- d. あくまでも過去に比べての話である。

(11) の例は、基本的に「～て」節と主要部である名詞が助詞「の」で結合する特殊なタイプの名詞句で、「テノ名詞句」とも呼ばれるが、名詞の種類や「～て」節との意味関係によってこの構造の容認度が異なることが指摘されている⁸⁾。

この例でも共通して見られるのは、構成成分同士の意味関係を規定できる述語の不在である。例えば (11 c) は、「事件」を主要部とする名詞句の形を取っており、「政権交代を狙って事件を起こす」などの動詞述語文と意味的に対応するものと考えられるが、「政権交代を狙って」という付帯状況を示す句と、名詞「事件」が具体的にどのように関わっているかが明示されているわけではない。即ち構成成分である句同士の意味関係、「何をどうするか」という情報は読み手または聞き手の推論に委ねられることになる。これは言い換えれば、意味関係を推論しやすい場合は (11) のような構造にしやすいという予測が可能になるが、実際に主要部の名詞が動作を表すサ変名詞である場合は同形式が作りやすいという傾向がある（内間 1996、茂木・森 2006）。例えば (11 a) は「食事」を主要部とする名詞句で意味的には「階段に座って食事をする」に対応すると言えるが、「～て」節と「食事」を結びつけると考えられる述語は「する」「行う」などと相対的に意味内容が少なく、形式的な動詞である。実際に「何をどうするか」に関する情報は名詞「食事」が担っているため、「する」などがなくても解釈する側の推論による負担はさほど小さくなく、それがテノ名詞句を成立しやすくしていると言える。

一方、この「テノ名詞句」の構造を韓国語で再現するには制限が強く、(11) の例も韓国語にするとどれも不自然になる。例えば (11 d) の構造に該当する韓国語 (12 a) は容認度が低く、自然な文にするためには (12 b) のように述語を加えた連体修飾句の形にする必要がある。

- (12) a. *etikkacina kwake-ey pihayse-uy mal-ita
 あくまでも 過去に 比べての 話だ
- b. etikkacina kwake-ey pihayse kulehta-nun mal-ita.
 あくまでも 過去に 比べて そうだという 話だ

3.2. 日韓の結合様式の違い

前節で紹介した日本語の例では、述語における省略という共通点が見られ、日本語の場合、名詞句においても意味上の述語の介在なしで構成成分同士が比較的容易に結合できたが、韓国語はそうでないという一貫した傾向があった。

日本語の場合、文や発語が文章の体裁を取りながらも述語が不完全で、文の末尾が途切れたような印象を与えることがある⁹⁾が、その点、韓国語の場合、文のレベルでは述語を中心とした「文」としての

8) 茂木俊伸・森篤嗣 (2006)。「テノ名詞句の意味と形式」『世界の日本語教育』16, 139-153.

9) 「ここ、めっちゃ寒いんだけど」のように「～けど」「～し」などの接続形式で締めくくられる文も関連現象として理解できるが、このような文を称する「中断節」(Ohori, 1995) や「言いさし文」(白川, 2009) などの

形を、語のレベルでは形態的に「語」と言える形を保つことをよしとする傾向が存在するのである。このことから、日本語と韓国語では言語単位を構成する様式が異なると考えることができる。

同様の傾向は「～系」「～的」などの接尾辞でも見られる。この接尾辞は「日系」「草食系男子」「亭主関白的」などのように形態素や語に相当するものと結合して用いられる一方で、句や文といった統語的単位とも結合する例があることが知られている。以下の(13)では、「～系」が「人のオーラのなものが見える」という節と結合しているような構造をとっている。併せて、(14)で見られるように、統語レベルの単位が複合語の一部として現れることも指摘されているが、いずれの場合も、該当する韓国語の形式は容認度が下がる。

(13) 私さ、[[人のオーラ] 的なものが見える] 系女子なんだけど (アニメ)

(14) a. [先月使った電気] 代

b. [やっと間に合った] 状態 (新屋 2012)

言語の普遍的な特徴として挙げられる「階層性」とは、音や語・句などの単位が結合してより大きな構造を構成することを指すものだが、構成成分がどのような形で結合するかには、個別言語的な違いがあるものと考えられる。日本語と韓国語でその違いをイメージしやすく例えるなら、日本語は、結合する要素同士が磁力のみでつながり、結合部で比較的簡単に離したりくっつけたりできる「磁石」、韓国語は結合する要素同士で決められた型があり、それが合えばしっかりかみ合っ切り離しにくい「チェーン」のような様相を呈していると言える。

4. まとめと今後の課題

本稿では日本語と韓国語の述語における省略傾向の違いに基づき、関連する現象を概観した上で、両言語の結合様式の違いが存在することを指摘した。

ここで取り上げた両言語の違いは、上記の関連現象に加え、従来より指摘されてきた日本語の「名詞志向」と韓国語の「動詞志向」(堀江・パルデシ 2009)、日韓の文法化の程度の違い(塚本 2012)などとも関連する可能性がある。例えば日本語のように述語が省略されやすければ、名詞形式の成分を中心に表現を組立てやすくなるだろう。また機能語や実質語の述語が省略された不完全な形を容認しやすいことが、言語形式の実質的な意味が失われて機能語に近づくという文法化への変化と関連すると考えれば、日本語の方で文法化がより進んでいる(塚本 2012)現象を説明するための示唆点となりうる。これらの問題に対する詳細な検討は今後の課題としたい。

付記

本論文は科学研究費補助金(16H03413)による研究成果の一部で、生越・尹・金・新井(2018)の一部(238-240)を拡張したものである。

参考文献

- 堀江薫・金廷珉(2011)。「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化—機能主義的類型論の観点から—」高田博行・椎名美智・小野寺典子(編)『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店、193-207。
- 堀江薫・ブラシャント・パルデシ(2009)。「認知言語学のフロンティア5 言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—」研究社。
- 日本語記述文法研究会(2009)。「現代日本語文法2」くろしお出版。

ㄨ 用語にも、「文が途中で切れたかのように見える」という認識が反映されているものと考えられる。

- 生越直樹 (2002). 「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方 -「きれいな花!」タイプの文を中心に-」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会.
- 生越直樹・尹盛熙・金智賢・新井保裕 (2018). 「省略現象から見えてくること-「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語-」『社会言語科学会第 42 回発表論文集』 236-245.
- Ohori, T. (1995). Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology, In Shibatani, Masayoshi and Thompson, Sandra A. (eds.) *Essays in Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins. 208-218.
- 新屋映子 (2014). 『日本語の名詞指向性の研究』 ひつじ書房.
- 白川博之 (2009). 『「言いさし文」の研究』 くろしお出版.
- 塚本秀樹 (2012). 『形態論と統語論の相互作用』 ひつじ書房.
- 内間直仁 (1996). 「助詞「の」と簡略化表現」『論集言葉と教育』和泉書院.
- 尹盛熙 (2017 a). 「日本語の述語における機能語の省略について」『社会言語科学会第 39 回大会予稿集』社会言語科学会.
- 尹盛熙 (2017 b). 「일본어와 한국어의 명사연결구성 -헤드라인에 나타난 ‘주체’와 ‘사건’에 대하여-(日本語と韓国語の名詞連結構成-見出しにおける「主体」と「事件」について-)」『日本學報』 112, 45-67.